

採 蓮

Siren

第十号

No.10



カラー図1：市川十良涅槃像之図(八代目市川団十郎の死絵)（千葉市美術館 2033103）



カラー図2：八代目市川団十郎の死絵（千葉市美術館 2033104）



カラー図3：八代目市川団十郎の死絵（千葉市美術館 2033106）



カラー図4：八代目市川団十郎の死絵（千葉市美術館 2033113）



図7：西川祐信筆「伊耶那岐・伊耶那美図」 メアリー・アンド・ジャクソン・パーク財団蔵



図20：西川祐信筆「墨磨り美人図」 フリーア美術館蔵



図22：西川祐信筆「宮詣図」 フリーア美術館蔵



図10：窪田つる・西川祐信『女今川姫鏡』 千葉市美術館蔵

絵画としての死絵——涅槃図仕立ての死絵を中心に

伊藤紫織

はじめに

江戸時代後期から明治期にかけて、歌舞伎役者が世を去ると、その姿をあらわして死去を報じる「死絵」が盛んに出版された。死者の姿をあらわすというその性格上、縁起が悪いとしてあまり取り上げられてこなかったが、近年役者絵の重要な一環として、また葬送儀礼をあらわしたり死生観をあらわしたりする資料として注目されつつある^{註1}。確かに死絵は役者絵としてさまざまな情報を含み、歌舞伎研究の上でも有用である。また民俗資料としても有効に活用されることが望まれる。絵画としての死絵はどうか。筆者は所蔵作品展「スターよ永遠に 追善浮世絵展」の準備から開催を通じて、死絵の絵としての面白さに触れることができた。ここでは絵画としての死絵について検討を試みたい。

死絵を取り扱うにあたって、まず死絵の範囲を確認し、死絵の像主の問題について述べたい。その後、死絵によくみられるパターンである涅槃図仕立てのものを取り上げ、その画面構造を考察する。単

に特殊な役者絵というだけではない、死絵の内包する意味の一端を解明したいと考えている。なお本稿では特に断らない限り、歌舞伎役者の死絵について述べるものとし、当時の用例の検討は行わず「死絵」という呼び名を用いる。

第一章 死絵の範囲——形式と像主

死絵は一般に浮世絵版画の一種として、そして像主が歌舞伎役者の場合は役者絵の特殊なジャンルとして位置づけられている。しかし「死者の姿をあらわして死去を報じる」という機能に注目するとき、通常浮世絵版画とは認識されない瓦版、一枚摺とも機能は共通している。役者の死を伝える一枚摺の最期物語には簡素な絵ではあるが役者の姿を付す場合もある^{註2}。また最期物語にみられるような美文で死の経緯を伝える文章は例えば「難波夢涙種替紋^{なにわのゆめなみのたねかき}」(八代目市川団十郎の死絵)^{註3}(千葉市美術館二〇三三一〇八、以下八代目市川団十郎の死絵については付録目録挿図参照)などにあるように死絵にもつきも

のである。

死絵は速報性を重視して出版される場合が多かった。例えば、『藤岡屋日記』によると、安政二年(一八五五)三月六日の初代坂東しうか死去時には三月七日から早くも死絵が出版され、三月二十五日には取り締まりが行われたという^{註4}。松浦武四郎の自伝でも六日朝にしうかが死んで、翌七日四ツ頃早く一枚目が出て、七ツ過ぎに二種類、夜に更に二種類出たことを伝えている^{註5}。しうかの発病と同時に準備を始めたとしても、極めて速やかに出版されている。嘉永五年(一八五二)二月十七日に四代目中村歌右衛門が大坂で死亡したときも、江戸でもすぐに死絵が出版され、二月二十七日には早くも取り締まられている^{註6}。舞台の口上を描いた役者絵のパターンを借りたり、すでに出版済みの役者絵を改変したりして出版される場合もある死絵は浮世絵版画の形式を踏襲しているが、死去を報じ、速報性を重視するという点では瓦版に接近している。

死絵には死を悼むという機能もある。高橋則子氏が指摘するように一枚ものの死絵の成立に際して役

者の追善草双紙が重要な役割を果たし、相互に影響関係があった^{註8)}。冊子である追善草双紙と一枚ものの死絵は形式によって容易に区別できる。しかし追善草双紙と死絵はある役者の死を悼むという同じ機能を持ち、意味の分野から死絵を考察する場合には切り離せない。安政二年(一八五五)、坂東しうかの死後に出版された追善草双紙『明烏夢物語』^{註9)}は八代目団十郎の追善もかねたものだが、まずしうかは権八のなりで登場し、幡随院長兵衛のいでたちの団十郎と出会う。死出の旅路の権八と長兵衛は死絵の一つのパターンで、歌川国貞「五代目松本幸四郎の死絵(六代目岩井半四郎三回忌追善)」(千葉市美術館二〇三三〇五一、図1)、八代目団十郎を権八しうかを女長兵衛とした「白井権八と女長兵衛(初代坂東しうかの死絵)」(千葉市美術館二〇三三一四二、付録目録挿図参照)のような例がある。地獄での芝居は「八代目市川団十郎の死絵」(千葉市美術館二〇三三一七)を思わせる。演目としてあがる明烏は、嘉永四年(一八五一)二月市村座「明烏花濡衣」で上演されたものでしうかの浦里、団十郎の時次郎で大当たりをとり、「浦里と時次郎(初代坂東しうかの死絵)」(千葉市美術館二〇三三一四一、付録目録挿図参照)においてもしうかは浦里、団十郎は時次郎であらわされている。死絵と追善草双紙の意味するところはかなり近い。



図2 「四代目中村歌右衛門の死絵A」
(千葉市美術館2033072)



図1 歌川国貞「五代目松本幸四郎の死絵 (六代目岩井半四郎三回忌追善)」
(千葉市美術館2033051)

死絵の多くは大判錦絵であり、浮世絵版画として取り扱えるものが大半を占めるが、意味を考察する場合は意味・機能で密接な関連をもつ瓦版・一枚摺、追善草双紙についても留意すべきであろう。

死絵の取り扱いにおいても一つ確認しておきたいのが像主の問題である。死絵は死者の姿をあらわすというその性格上、像主によって分類されるべきもので、肖像としての要素をも含む^{註10)}。画中に複数の死者が描かれる場合像主をどう考えるか。例えば「四代目中村歌右衛門の死絵A」(千葉市美術館二〇三三〇七二、図2)は四代目歌右衛門と五代目市川竹之丞が人物の大きさとしては同等に描かれているが、俗名、行年、法名、死亡年月日、墓所といった情報が歌右衛門についてのみに記される。この場合歌右衛門は竹之丞の二年後に死んでいることから像主を歌右衛門とするのが適切と考える^{註11)}。複数の死者が描かれ、人物の大きさは同等でも、一人についてだけ死亡の年月日、戒名などの情報が付されている場合、その人物の死絵として取り扱ってよいだろう。複数の死者が大きさも情報も同等な場合、例えば「四代目中村歌右衛門の死絵B」(千葉市美術館二〇三三〇七三、図3)はどうか。前述の「四代目中村歌右衛門の死絵A」と同じく、先に死んだ竹之丞が歌右衛門を迎える設定である。内容を考慮すると、竹之丞の情報が十分含まれていても制作の契



図3 「四代目中村歌右衛門の死絵B」
(千葉市美術館2033073)

機は歌右衛門の死によることが明らかであり、この場合も歌右衛門を像主とするのがふさわしいと考える。しかし例えば「極楽道中図(初代坂東しうかの死絵)」(千葉市美術館二〇三三一四三、付録目録挿図参照)^{註10}の八代目市川団十郎としかはどうか。しうかの死のほうが遅く、それを契機に制作されたことは疑いないが、しうかのみを像主とは言い切れないように思われる。この場合強いていえば像主は団十郎としかということになるだろう。団十郎としうかは名コンビで、死亡時期も約半年しか離れていない。またしうかも人気役者ではあったが、人気でも役者としての格でも団十郎が優っている。それでは、団十郎としうかの場合は特例とし、この二人の場合は常に二人共を像主とみるのがよいか。「浦里と時次郎(初代坂東しうかの死絵)」は人物の大きさは同等だが、情報はしうかにのみ付されている^{註11}。この場合は像主を団十郎としうかの両名とす

るより、しうかを単独の像主として取り扱うべきだろう。しうかと団十郎の組み合わせでも、しうかの死絵として取り扱うべきものもあれば、両者の死絵とするほうがより適切なものもある。二枚続、三枚続の場合は更に複雑な事態が生じる。まず「極楽道中図(初代坂東しうかの死絵)」のように、二枚続であることが明白な場合を考えよう。右の一枚だけを見ると、「極楽道中図」と題された八代目市川団十郎の死絵のようにみえ、左側に図柄が続くことはわかるが、そこに誰が来るのか、またその人物も像主に相当するような死者なのかは、厳密には判断できない。実際は八代目団十郎の名コンビといえしうかと決まったも同然ではあるが、右の一枚だけでは断定できない。左の一枚だけをみたときも同様で、確実なのは坂東しうかの死絵で、右側に最低もう一枚あるということだけである。二枚続、三枚続であることが、一枚だけみていてはわかりにくいものもある。例えば「三代目坂東三津五郎の死絵A」(千葉市美術館二〇三三〇二四、図4)と「五代目瀬川菊之丞の死絵A」(千葉市美術館二〇三三〇二六、図5)は両者の着物が揃いであり、書き込んである「道行鳥辺山」の文章もつながっているので二枚続だが、文章をよく読まないかぎりにはそれぞれ単独の死絵にもみえる。「三代目坂東三津五郎の死絵B」(千葉市美術館二〇三三〇四七、図6)と背景の



図6 「三代目坂東三津五郎の死絵B」
(千葉市美術館2033047)



図5 「五代目瀬川菊之丞の死絵A」
(千葉市美術館2033026)



図4 「三代目坂東三津五郎の死絵A」
(千葉市美術館2033024)

雲形がよく似た「五代目瀬川菊之丞の死絵B」（早稲田大学演劇博物館一四一〇一六〇）は二枚続の可能性があるが、それぞれ単独の死絵ともみえる^{註12}。

死絵を取り扱うには像主によって分類することになる。しかし、例を挙げたように像主の判断は混乱が生じやすい。像主の判断に迷う場合、一つ一つの図柄や文字情報にそって、意味から像主を定め、情報、大きさ共に同等にあらわされる場合は複数の像主として取り扱うべきだろう。複数の像主を組み合わせた死絵を考察する場合は、単独の像主の死絵でありながら複数の像主の死絵に近いものも合わせて考察の対象とする必要がある。例えば初代坂東しうかと八代目市川団十郎の死絵を、コンビの死絵として考察する場合は「極楽道中図（初代坂東しうかの死絵）」のような両者を像主とするものだけでなく、「浦里と時次郎（初代坂東しうかの死絵）」のように、情報の付され方からしうかの死絵と判断するが、団十郎も同じくらいの大きさで描かれているものも考察に含めるべきだろう。死絵を考察する場合、像主をどう取り扱うかを明示することの必要性を提唱したい^{註13}。

もう一点、像主をどの時点の名前で呼ぶかについても、指針を定めておく必要があるだろう。基本的には死んだ時点での名前によって*代目***の死絵と呼ぶが、より知られた名前がある場合は、そ

ちらをとり、死んだ時点の名前を併記することとしたい。例えば三代目尾上菊五郎（初代大川橋蔵）の死絵、などである。

第二章 涅槃図仕立ての死絵

死絵の基本的な構成は死者を水袴姿で描き、俗名、戒名、死亡年月日などの情報を書き記すものである^{註14}。最初期の死絵、勝川春重「二代目市川八百蔵の死絵」（チェスター・ビーティ美術館蔵、安永六、一七七七年没）がすでに反魂香の趣向であらわされていたが、その後、多くの死絵が出版される中でさまざまな趣向の作品が出てくる^{註15}。矛盾しない複数の趣向を重ね合わせることも多い。本稿では涅槃図の形式を踏襲したものを取り上げ、絵画としての死絵について考察したい。

涅槃図は釈迦の臨終の様子を描いたもので、追悼の意をあらわすという点で死絵にはふさわしい形式である。涅槃図の図様は広く知られていたため、それ以前に死絵以外でもその枠組みを借りた作例がある^{註16}。英一蝶（一六五二〜一七二四）の「見立業平涅槃図」（東京国立博物館）は釈迦のかわりに在原業平を描いている。伊藤若冲（一七二六〜一八〇〇）の「野菜涅槃図」（京都国立博物館）は、青物問屋を家業とした若冲が何らかの意図により野菜や果物で涅槃

図を構成したものである^{註17}。釈迦の代わりに日蓮や法然といった高僧を描く高僧涅槃図も版画で流布していた。鈴木芙蓉（一七四九〜一八二六）は「芭蕉涅槃図」（早稲田大学會津八一記念博物館）を描いている。

涅槃図仕立ての死絵では歌川国貞「初代尾上松緑の死絵」（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館一四一〇〇三八・一一四一〇〇三九他、文化十二、一八一五年没）が早いとされてきた^{註18}。先行する一枚摺として信多純一氏が言及された寛政八年（一七九六）三月二十九日没の二代目嵐小六を鳥羽絵風に簡略に描いたものがある^{註19}。それに続くものとして文化五年（一八〇八）十月九日没の四代目市川団蔵を主に描いた涅槃図仕立ての「市川団蔵飛双六」（双六コレクション 翔奉庵）がある^{註20}。一見して涅槃図の構成であるが、「しんぱん ねはんぞうとびす ごろく」と振り仮名があり双六でもある。団蔵の死を契機に、団蔵を涅槃図の釈迦つまり死者としてあらわした、死絵に極めて近いものである。団蔵は蛇の目紋をつけているので最後に演じた大坂小川座での「八陣」の加藤清正の姿である。雲に乗って近づいてくる役者三人には「こじん」とある。図版からははっきりしないが、似顔と紋で先に世を去った人氣役者をあらわしているのだろう。団蔵を劇中の扮装をした役者たちが取り巻く。下のほうに猪、馬、

猿、蛇、牛、虎、蛙が描かれる。もともと涅槃図には仏弟子を取り巻くように動物たちも悲しむ姿が描かれていた。木は桜のようだ。荻田氏は「一人の役者に焦点をあわしながら、結果的には役者名寄となっているもの」と分類する。その後の涅槃図仕立ての死絵では縁者の役者を描くのが一般的であるが、ここでは同時代の人気役者たちが描かれている。この作品は双六の構成をとりながら、一方では涅槃図仕立ての死絵ともみることができ。戒名、墓所、死亡日等のデータはなく、辞世もない。

歌川国貞「初代尾上松緑の死絵」では、松緑がまるで釈迦のような着衣で横たわっており、他の人物よりやや大きく描かれている^(註21)。雲に乗って迎える役者三人は、光背のように重ね扇を背負っている。松緑は初代尾上菊五郎の門人で、重ね扇に抱き抱は尾上菊五郎の紋である。三人のうち中央後ろに座っているのは、重ね扇に抱き柏の紋を背負っていることと顔立ちからみて、松緑の師である初代菊五郎(天明三、一七八三年没)であろう。右奥の酒吞童子、ろくろ首といった化け物と手前の九尾の狐、天竺徳兵衛の蛇、がまといといった動物は、松緑が得意とした怪談畫言にちなんでいる。重ね扇の紋をつけているのは尾上菊五郎家ゆかりの役者たちで、右側の一番前にいるのが、松緑の養子で後に三代目尾上菊五郎を名乗る三代目尾上梅幸である。動物は松緑の

得意とした演目にちなむものであるが、釈迦の入滅を悲しむさまざまな動物を描くという涅槃図の決まりごとにも沿っている。戒名、墓所、死亡日等のデータはないが、辞世が記されている。極印、版元印があるので通常の浮世絵出版の過程を経ているものであろう。

「金橋玻璃寛像」(関西大学図書館1027746)及び『許多脚色帖』は文政四年(一八二二)九月二十七日没の初代風璃寛(初代風橋三郎)の追善摺物で涅槃図仕立てとなっている^(註22)。璃寛は替紋の橘をつけた着流しで横たわっている。取り囲む役者たちはあまり似顔では描かれておらず、涙をぬぐう手に隠れて顔がわからないものもいるが、みる人には紋である程度人物が特定できるのだらう。降りてくる雲に薄墨で五名の人物があらわされている。上部の文章によれば葬儀の様子を描いたもので、画面下の動物たちは国姓爺の虎であつたり左甚五郎の猫であつたりするようだ。釈迦が入滅するときの沙羅双樹を璃寛ゆかりの橘の木に換えて、橘から黄金の花である大判小判が舞っている。法名と辞世が記される。

風璃寛の涅槃図仕立ての死絵についてはもう二点『許多脚色帖』にのる図と有楽斎長秀「璃寛像黄泉発足」がある^(註23)。後者は武将の扮装で横たわる璃寛を作者奈河晴助や金主たちが取り囲んでいてそれぞれの名前が書き込まれている。また、璃寛の好物

として細工物、見世物、年中行事が描かれている。

嘉永五年(一八五二)二月十七日没の四代目中村歌右衛門には二種の涅槃図仕立ての死絵が残る^(註24)。二枚続(早稲田大学坪内博士記念演劇博物館〇一四一〇一六六・〇一四一〇一六七)のものからみよう。歌右衛門は横たわっているが両目が開いていてまだ生きていようだ。乱れた髪が一筋額に落ちてい

る。歌右衛門は周りの人物よりかなり大きく描かれている。歌右衛門の手の甲と周りの人物の顔がほぼ同じ大きさである。取り囲む男たちの顔は袖に隠れてみえないが、一人一人名前が書いてあり、人物が特定できる。例えば左側で歌右衛門の腕に取りすがるのは弟子の初代中村芝雀である。女形は顔がわかるように描かれている。手前には動物たちも描かれている。沙羅双樹の代わりに竹が描かれているように見えるが、よくみると竹を描いた屏風が後ろに立てられている。屏風の縁の模様は歌右衛門の替紋の裏梅になっている。その屏風に掛けるかたちで、出山釈迦の掛軸と、歌右衛門の履歴、行年、死亡年月日、墓所、戒名を記したものが書き込まれている。出山釈迦の顔も歌右衛門の似顔のようだ。

一枚もの(早稲田大学坪内博士記念演劇博物館〇一四一〇一七二)のほうは左下に「不許売買」とあり、涅槃図仕立ての追善摺物の体裁である。画面上部の雲の中に甌雀(四代目中村歌右衛門の俳号)の辞

世「白粉もけふをかきりや雪の果」と六々鱗による追悼の狂歌が載る。蓮の花を枕に横たわる歌右衛門は目を閉じてすでに息を引き取った様子。嘆き悲しむ人々には名前が書かれている。下には動物たちも描かれるが、鹿と九尾の狐は舞台で役者が動物に扮したものである。左と右から雲に乗って死者が迎えにくる。左の雲の上に姿がみえる芦雪は、上方の浮世絵師戯画堂芦ゆきか。画風からいっても上方での出版であろう。

嘉永七年（一八五四）八月六日没の八代目市川団十郎には少なくとも三種の涅槃図仕立ての死絵がある^{註25}。「市川団十良涅槃像之図」（千葉市美術館二〇三三・一〇三）は「八代目市川団十郎関係死絵等貼込帖」（国立劇場）にも同じものが貼り込まれていて、そこらには香炉の絵と団十郎の辞世を書いた袋が付いているので、厳密には追善摺物である。眼をわずかに開いた団十郎が横たわっている。紫の鉢巻は歌舞伎の舞台で病人を演じるときに用いる病鉢巻である。団十郎は周りの人物よりかなり大きく描かれている。黄色の衣は僧衣を連想させる。仏になっている先に死んだ役者に黄色の衣を着せる例が「八代目市川団十郎の死絵」（千葉市美術館二〇三三・一四）にあり、また黄色い衣をまとった釈迦を描く例（「極楽道中図（初代坂東しうかの死絵）」で四代目中村歌右衛門の似顔で描かれた釈迦は黄色い衣を着てい

る）もある。市川一門が三升の紋付姿でまわりを取り囲んでいる。顔がみえていゝものは似顔であらわれ、それぞれに名前が短冊状に書き込まれている。背景には市川団十郎家ゆかりの花、牡丹を蓮花のように描いている。背景は縦に線が入っているので屏風に描かれているものを立てまわしたつもりであろう。名前の短冊なしで描かれている女性団十郎のファンとみておく。

「八代目市川団十郎の死絵」（千葉市美術館二〇三三・一〇五）では水袴姿の団十郎が眼を閉じて横たわっている。沙羅双樹らしき四本の木が生えている。枕元には似顔であらわされた父五代目市川海老蔵が手を合せている。二人の若い男は団十郎の弟たちで、市川猿蔵と市川高麗蔵（似顔からみて顔に手を当てているほうが高麗蔵と思われる）であろう。いろんな身分の女たちが泣き崩れている。水袴で座った姿に辞世を配したような死絵を持つもの、姿絵に団十郎の書置と称するものをつけた瓦版らしき横長の出版物を持つものもある。八代目が揮毫したらしい扇子を持つ女もいるし、菩提を弔うために出家した女は切った髪を差し出している。

もう一点の「八代目市川団十郎の死絵」（千葉市美術館二〇三三・一〇四）では、黄色い着物を着流しにした団十郎が目をつすらと開けて横たわっている。やはり団十郎はかなり大きく描かれている。童

女から中年女性まで幅広い年代、武家女から遊女までさまざまな身分の女性たちが悲嘆に暮れている。猫が一匹涙をぬぐっているが、これも雌猫なのだろう。女たちは悲嘆に暮れつつも、スター団十郎に触れようというのか、足をなめるもの、股間に手を差し入れるものまでいる。涅槃図において釈迦の足に触れる人物が描かれることはあり、また仏伝で出家する釈迦との別れを惜しんで愛馬が足をなめるエピソードはあるが、ここに描かれた女性たちの行動は逸脱気味で、女性たちの団十郎への熱狂ぶりを揶揄しているのであろう。死亡年月日、戒名、行年と大坂加賀徳の追悼句「しら秋や露の玉ちる朝風」が記されている。

安政六年（一八五九）三月二十三日没の五代目市川海老蔵（七代目市川団十郎）にも涅槃図仕立ての死絵（国立劇場）がある^{註26}。大判錦絵二枚続で、着流しでぎょろりと目をむいた海老蔵が横たわり、周囲には顔を袖で隠して嘆き悲しむ役者たちが描かれる。円形に名前が記されている。右端の「くによし」とよくに」は浮世絵師の歌川国芳、三代歌川豊国を示す。歌舞伎に登場する動物も描かれている。

同年五月十三日没の四代目三桙大五郎にも涅槃図仕立ての死絵が報告されている^{註27}。

明治三十六年（一九〇三）二月十八日没の五代目尾上菊五郎には四代鳥居清忠による二枚続の涅槃図仕

立ての死絵（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館二〇一〇五二）がある。黒い縁取りの額絵のような体裁をとっている。菊五郎は釈迦のような着衣で他の人物よりやや大きく描かれる。雲に乗って蓮華を散らしながら、僧体の人物一名と先に没した役者三名が降りてくる。雲が画面の縁取りを越えているので、雲は縁取られた絵の外にあることになる。役者は紋をかたどった光背のような円光を背負っている。左で頭を下けている役者たちは重ね扇の紋がみえるので尾上菊五郎一門と知れ、右の役者たちもまたゆかりの人物であろう。さらにそのまわりに九尾の狐や般若の面、一つ家の老婆などの動物、化け物が集まっている。蛇は天竺徳兵衛の蛇だろう。木は沙羅双樹ではなく柳と柏か。芝居の道具がぶらさがっている。落語から取り入れた怪談牡丹灯籠にちなむ骸骨と灯籠も描かれている。「五世梅幸」と俳名で名前を示し、辞世が記されている。

同年九月十三日没の九代目市川團十郎の死絵、三代歌川国貞「名優九代目市川團十郎（九代目市川團十郎の死絵）」（千葉市美術館二〇三三二七、図7）は大判錦絵三枚続である。白い死装束を着て頭を右側にして目を開けて横たわっている。「嗣子福三郎」は短冊で記されるが、それ以外も似顔と紋で人物を特定しているのだろう。団十郎の傍らから煙のように雲形が立ち上り、死後の世界を表現してすでに世

を去った歌舞伎役者、劇作者などが描かれている。仏教の戒名にあたる霊名、俗名、没年、死亡地、死亡日時、墓所が記されている。団十郎は神道に帰依しており、葬儀も神式で行われた。涅槃図の形を借りながら、頭が右側であるのは仏教ではなく神道に帰依したことを示すと思われる。



図7 三代歌川国貞「名優九代目市川團十郎（九代目市川團十郎の死絵）」
（千葉市美術館2033171）

涅槃図の形式を用いた死絵及び追善摺物をみてきた。釈迦の臨終の様子を描いた涅槃図は、そもそも死絵にふさわしい形式である。弟子、縁者が集うという点も死者への追悼を示すのに適している。涅槃図には弟子、人間のみならず動物も描かれることが多かったが、死絵、追善摺物においてはその動物は歌舞伎の演目に関連する動物や化け物に置きかわることが多い。動物がいなくても涅槃図仕立ての死絵を構成することは可能であり、実際八代目市川團十郎の死絵においては猫一匹を除いてほとんど動物は省略されている。しかし多くの場合、人間だけでなく、歌舞伎の舞台上に登場する動物や化け物が描かれる。これは死絵の作り手も、また死絵を手に入れる人、みる人も、涅槃図には人間以外にさまざまな動物が描かれるという認識を共有していたためであろう。沙羅双樹は、死絵の像主に関連深い別の植物に置きかえて描かれたり、省略されたりする。置きかえる際には背後に置かれた屏風に描かれた植物として、つまり画中画としてあらわされる場合もある。死絵の像主は涅槃図における釈迦の形をとって、しばしば常人より大きく描かれる。これは涅槃図における釈迦を大きく描くという伝統的な形式を踏襲している。その一方、死絵においても像主を大きく描くほうが望ましかっただろう。役者絵でもある死絵では当然肖像性が重視される傾向があり、像主を大

大きく描けばそれだけ大きく似顔をあらわすことができる。それ故半身像の死絵や、時には大首絵の死絵も存在する。涅槃図仕立ての死絵では死を悼む人物たちも似顔または名を示して特定の人物としてあらわされることが多い。もともと涅槃図でも持ち物や身ぶりで人物はある程度特定されていた。死絵においては、像主以外についても名を書き込んでまで人物を特定できるようにする。それは、舞台の物語内容だけでなく役者自身をみて、また代々受け継がれる名前をも楽しむという歌舞伎の特色によるものだろう。親子、師弟といった役者の周りの人間関係も含めて歌舞伎役者は存在する。多くのゆかりある人物をそれとわかるように描くことによつて、みる人もその役者を取り巻く人間関係をたどることができる。死絵において涅槃図の形式は通夜または葬儀の様子として読みかえられたとも考えたい。その場合、人物を特定できるように描いて「誰が葬式に来るか」という観者の興味、関心も満たしていたのだろう。このようにみていくと「八代目市川団十郎の死絵」(千葉市美術館二〇三三・一〇四)は他の涅槃図

仕立ての死絵とはかなり異なっていて、戯画のように女性ファンの悲しみを茶化している。それでも「釈迦の足をなめる」という仏伝のエピソードのつながりは残っている。神道に帰依した九代目団十郎は、通常の涅槃図とは頭の向きを逆にした体裁で

死絵が作られた。これは、頭を逆向きにして仏教以外を信仰したことを示すのだろう。頭が左側という仏教の涅槃図における約束事を、作り手もみる人も了解していたからこそ意味をもつ構成である。涅槃図の形式を用いて一部を読みかえ、また描きかえて作り手が仕掛けた死絵のイメージ構造を、当時の多くの人々は容易に理解して楽しんでいたのである。

おわりに

まず、死絵を検討する前提として、死絵として取り扱う範囲を確認した。浮世絵版画として取り扱われる以外の瓦版などにも、死絵と関連が深いものがあり、留意が必要である。像主については、複数の人物が描かれている場合、死者のうち最後に死亡した人物が死絵の像主である場合が多い。しかし名コンビを取り合わせた死絵の場合は、後から死んだ役者の死を契機として出版されていても内容面では先に死んだ人物も合わせて像主と考えるのがふさわしい場合もある。

涅槃図仕立ては死絵によくみられる形式である。もともと涅槃図は釈迦の臨終の様子を描いたもので追悼の意味があり、涅槃図仕立ての死絵でも基本的にその意味を踏襲している。動物も集う、像主が大きく描かれるといった涅槃図の決まりごととも死絵に取り入れられている。死絵の作り手のみならず観者

も涅槃図に対する理解を共有しており、涅槃図の形式を部分的に読みかえたり描きかえたりした死絵のイメージ構造が理解され享受されていた。

死絵は速報性を求められるため一枚一枚の完成度はそれほど高くないものも多いが、「死者をあらわす」という主題に特化した作例が数多く残っており、さまざまなイメージの取り扱いをみることができる。涅槃図仕立ての死絵では、伝統的な形式に対する理解を前提として一部を変容させる操作が行われている。今回死絵の内包する豊かなイメージ世界の一端を解明できたとすれば幸いである。

浮世絵版画の役者絵は肖像という観点からだけではとらえきれないが、死絵は役者絵としては肖像の要素が大きい。今回は死絵の取り扱いにおける死絵の範囲、像主といった基礎的事項を確認し、涅槃図仕立てというほんの一パターンを考察するにとどめたが、死絵を更に検討する上で、死絵と肖像について考察する必要を改めて感じた。死絵と肖像については、画中画の構造を持つ死絵を取り上げて稿を改めて考察を試みたい。

1 現在の死絵研究の到達点を示すのが原道生「歌舞伎の死絵について」『生と死の図像学』明治大学人文科学研究所編 風間書房 一九九九年である。なお、ほぼ同じ内容で『死絵』について——基礎的事項の確認——『生と死の

- 図像学——アジアにおける生と死のコスモロジー」至文堂 二〇〇三年）として採録されている。
- 主だった先行研究は藤澤茜「死絵に見る役者の人気」（『浮世絵芸術』一四六、二〇〇三年）の註一に列記されている。中でも林美一「死絵考（上）・（下）」（『浮世絵芸術』四五・四六、一九七五年）が特に重要である。
- また近年積極的に死絵の収集を進めている国立歴史民俗博物館では、葬送儀礼を研究する民俗学の資料として活用されている。
- 荻田清「上方板歌舞伎関係一枚摺考」（清文堂出版 一九九九年）三八頁〜四二頁。
- 『藤岡屋日記』第五十四。安政二年（一八五五）（『近世庶民生活資料 藤岡屋日記』第六巻 三一書房 一九八九年 四四七頁上段）。
- 右坂東秀佳追善絵一件
三月七日より出版致し候処、追々仰山に出版致し、都合九十番出、板元十八軒也、右二付、絵双紙名主、二十五日二手入有之、通り三丁目寿二而板を削也、此外二も十四五番出版致し候得共、是ハ見落し二相成、構なし、中ニて八代目鏡二向ひ居候処へ、志うか駕籠二乗り来候駕籠昇、鬼にて風音八也、是計大当りニて跡ハ残らずはづれ也。
- この特に大当たりだったという図柄が「初代坂東しうかの死絵」（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館一一四〇〇二八他）に相当する。
- 松浦武四郎「校注簡約松浦武四郎自伝」（北海道出版企画センター 一九八八年）一五八頁。
- 七日、雨、夕方霽、四ツ頃早しゅうか死画一枚出、夕七ツ過二通り、夜に入又二通り斗り出る。
- 『藤岡屋日記』第三十七 珍説集 嘉永五年（一八五二）（『近世庶民生活資料 藤岡屋日記』第五巻 三一書房 一九八九年 四七頁上段）。
- 高橋則子「草双紙と演劇——役者似顔絵創始期を中心に」（『及古書院 二〇〇四年』二八七頁〜二八九頁）。
- 『八代目団十郎集』（『演劇文庫』第三編 一九一五年）による。
- 8 死絵と肖像については、死絵における画中画の構造を考察する別稿において言及する予定。
- 9 「錦絵に見る役者への追悼——『死絵』の世界」展図録（国立劇場 一九九五年）でも四代目中村歌右衛門の死絵としての取り扱いである。「江戸歌舞伎——歴史と魅力」展図録（東京都江戸東京博物館、一九九五年）では同じ図柄に「四代目中村歌右衛門、十二代目市村羽左衛門」とある。「お江戸東京博物館所蔵品には「市村羽左衛門」（竹之丞の前名）と書き込まれている。
- 10 千葉市美術館では当初の登録時に像主を一人に定めて取り扱うことを選択したため、後に死亡した初代坂東しうかの死絵として分類している。
- 11 国立劇場、前掲展覧会図録では八代目市川団十郎、初代坂東しうか両者の死絵という扱いにしている。
- 12 国立劇場、前掲展覧会図録では三代目坂東三津五郎と五代目瀬川菊之丞それぞれの死絵に分けている。これは図録に掲載された図版から判断すると、三津五郎の背景は雲の色板が一枚足りないようにみえるため、雲があまり似ていないと認識されたのだろう。
- 13 例えば複数の同等と思しき像主があらわされる場合、最後に死亡した人物のみを像主として取り扱う方法も考えうる。この場合は必ず像主が一人に決まることになり、また誰が取り扱っても同じ人物を像主とするので、像主についての混乱を回避することができると。
- 14 現在知られる最初の死絵、勝川春童「二代目市川八百蔵の死絵（チエスター・ピーティ美術館）」は文字情報としては役者名と追善句があるのみで、戒名、行年を書くという形式は寛政十一年（一七九九）没の六代目市川団十郎の死絵あたりに整ったようである。最初期の死絵については、浅野秀剛「勝川春童 二代目市川八百蔵の死絵」作品解説（『秘蔵浮世絵大観 別巻』講談社 一九九〇年）チエスター・ピーティ美術館 四四図）参照。また六代目市川団十郎の死絵あたりで死絵の形式が整ったことについては、藤澤、前掲論文、四三頁上段参照。
- 15 藤澤氏が挙げた九パターン、「①立役の役者は水袴、女方は女性の姿で描かれる②先に没した死者が迎えにくる③
- 旅姿で描かれる④当り芸を描く⑤涅槃図に模して描く⑥袈裟を掛ける・蓮の花の上に座するなど、仏教的要素が盛り込まれる⑦同じ頃に没した役者とともに描かれる⑧掛け軸の中に描かれる⑨反魂香の趣向で描かれる」は死絵にみられる多くの要素を網羅した有益なものである。しかし例えば「八代目市川団十郎の死絵」（千葉市美術館二〇三三一〇）にみるように、先に没した役者が迎えにくぎでいて②、③、④、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨というふうな複数のパターンに属する作品も少なからずあり、パターンで分類して取り扱うことは難しい。
- 16 信多純一「変り涅槃図考」（信多純一『にせ物語絵』平凡社 一九九五年）。
- 17 制作の動機を弟の死とする清水義明氏の説、母親の死とする佐藤康宏氏の説などがあり、単に面白さを求めているという制作事情が想定される。新江京子「伊藤若冲筆『果疏涅槃図』考——見立てと鑑賞の場」（『美術史研究』四三・二〇〇五年）参照。
- 18 藤澤、前掲論文、四三頁下段。
- 19 「許多脚色帖」（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館）に載る。信多、前掲書、一九九頁〜二〇〇頁、図一九。
- 20 荻田、前掲書、一二四頁。挿図は同書、一二五頁。
- 21 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館浮世絵図覧システムの同図、組解説を参照した。
- 22 「日英交流大坂歌舞伎展——上方役者絵と都市文化」展図録（大阪歴史博物館・早稲田大学坪内博士記念演劇博物館二〇〇五年）図二一三および同図版解説参照。
- 23 信多、前掲書、二〇二頁〜二〇三頁、図二一・二二。
- 24 筆者は未確認であるが、荻田清「上方板歌舞伎関係一枚摺一覧」（荻田、前掲書）に、歌右衛門初期物語涅槃像人（『近世伎史』二四、東京大学霞亭文庫）があげられている。
- 25 なお、荻田、前掲「上方板歌舞伎関係一枚摺一覧」に挙げられた「八代目十郎涅槃図」（『保古帖』大阪府立中之島図書館）は「先月」と始まるようなので、ここであげる三種とは別のものである。恐らく「八代目市川団十郎の死絵」（Dien Collection Danjuro VIII-5）と同図様。また、市川団十郎家ゆかりの瓢箪を八代目団十郎に見立て、そ

の周りを仏や動物が取り巻く柴田是貞「ふくべねはん図」がある。信多、前掲書、二一〇頁、図二七。

国立劇場、前掲展覧会図録、図八七。またこの図柄は古堀栄「死絵」(『浮世絵界』四一二、昭和十四年)でも紹介され、国芳と豊国の名がみえることが指摘されている。

荻田、前掲「上方板歌舞伎関係一枚摺一覧」に「荷堂主人誌、貞信筆「梅升涅槃像」(『近世伎史』三十四 東京大学霞亭文庫)があげられている。

凡例

八代目市川団十郎死絵目録 未定稿

* 本目録は八代目市川団十郎の死絵について、全貌の把握を目指し、なるべく多くの作品を目録化するものである。一枚摺・瓦版に属すると思われるものも目録に含めた。

* 八代目市川団十郎死絵目録に続いて、初代坂東しうか、初代市川猿蔵を像主とする死絵で八代目市川団十郎が描かれるものを列記した

* 挿図掲載の都合上、千葉市美術館所蔵品を優先的に取り上げる。千葉は千葉市美術館所蔵品であることを示し、千葉（青木）は千葉市美術館に寄託を受けている青木コレクション所蔵品であることを示す。千葉市美術館に所蔵しない図柄についてはウェブ上で画像を公開している早稲田大学坪内博士記念演劇博物館浮世絵閲覧システム掲載作品・東京都立中央図書館特別文庫室所蔵品を優先的に取り上げる。

* 所蔵先作品番号は1点についてのみ記し、重複は他所蔵先欄に記す。

* 所蔵点数が多い五箇所のコレクションについて、他所蔵先として項目を別々に立て、当該コレクションにおける作品番号等を記した。国立劇場については展覧会図録の図版番号を記した。（一）内は略称。①早稲田大学坪内博士記念演劇博物館浮世絵閲覧システム掲載作品（演博）②東京都立中央図書館特別文庫室（都中図）③国立劇場④国立歴史民俗博物館（歴博）⑤Dien Collection(Dien)

* 他所蔵先の項目における作品番号後の（一）内の付記は同図柄における異同を記す。

* 林図版番号は林美一「死絵考」上・下の挿図の番号を示す。

* 挿図を示さなかったものについては、以下のデータベースを合わせて、参照いただきたい。

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館浮世絵閲覧システム

<http://www.einpaiku.waseda.ac.jp/db/einpaikunishi/>

東京都立中央図書館特別文庫室貴重資料画像データベース

<http://metro.tokyo.opac.jp/mnl/tpic/>

国立歴史民俗博物館蔵錦絵データベース

<http://www.rekihaku.ac.jp/index.html>

* この目録作成に先立つ調査・情報収集にあたり、Eis Tinos氏・大久保純一氏の協力を得ました。謝意を表します。

林図版番号	他所蔵先(演博)	他所蔵先(都中図)	他所蔵先 (国立劇場)	他所蔵先 (歴博)	他所蔵先(Dien)	その他の所蔵先	千葉市美術館 重複
上22	114-0075						
	014-0234/114-0111	5721-C070					
	014-0223/014-0263				DanjuroⅧ5-10		
	114-0130				DanjuroⅧ5-45		
	014-0253/114-0071/114-0093/201-2107 014-0221/014-0242/201-5061(裱に木目)				DanjuroⅧ5-06/5-07		2953487
	014-0241/114-0110/201-5060			H-22-1-22-35			
	114-0059	5721-C074			DanjuroⅧ5-33		
	014-0255/014-0265/114-0094			H-22-1-22-29	DanjuroⅧ5-20		
	114-0082 014-0229/401-0576(作家名あり)				DanjuroⅧ5-43		
下3					DanjuroⅧ5-21		
	014-0248/201-5065	5721-C068/5721-C068ア/5721-C068イ					
	014-0260/114-0103						
		5721-C075/5721-C075ア					
	014-0224	5721-C067/5721-C067ア			DanjuroⅧ5-08		
	014-0247/114-0078/114-0079	5721-C073/5721-C073ア		F320-4-30	DanjuroⅧ5-26		
	014-0240	5721-C080		F320-177			
	014-0226/014-0257/114-0264/114-0060/114-0243	5721-C041/5721-C041ア		F320-4-30	DanjuroⅧ5-11		
	014-0218/014-0243/114-0108/201-5068	5721-C045		F320-123	DanjuroⅧ5-39	立命館大学 arcBK06-0003「日本 市川三筋之巻物」の うち	
	014-0255						
下5	014-0262/114-0107				DanjuroⅧ5-41		
下6	114-0069 014-0235(背景三色)			H-22-1-22-28			
下7		5721-C081		H-22-1-22-34	DanjuroⅧ5-23		
下8		572-C008(01)	74(画家 名あり)	F320-179			
下9	014-0258/114-0083/114-0124				DanjuroⅧ5-19		
	014-0217	N097-001(ひょうたん型印あり)			DanjuroⅧ5-31		
下10	114-0098	5721-C043					
下11				F320-572			
	114-0062	5721-C083		F320-183			
	114-0061	5721-C048/5721-C048ア/ 5721-C048イ			DanjuroⅧ5-50	江戸東京博物館	
	014-0225	5721-C066		F320-185			
	014-0027/014-0246/114-0104/114-0134/201-5062	5721-C033/5721-C033ア/ 5721-C033イ/5721-C033ウ		F320-4-30/ F320-126	DanjuroⅧ5-09		2953493
下14	014-0219/114-0106	5721-C061		F320-518			

八代目市川団十郎死絵目録 未定稿

No.		作家名	作品名	判型	所蔵先1	所蔵先作品番号	追悼句等筆者	備考
1	図①	歌川豊国(三代)	早野勘平(八代目市川団十郎の死絵)	大判錦絵	千葉	2033058		林論文に五代目市村竹之丞死絵とあるのは誤り
2			八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033076		
3			八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033077		
4		歌川国芳	八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033078		
5			八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033079		
6			八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033080		
7	図②	長谷川貞信	八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033081		異版あり
8			八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033082		
9	図③		八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033083		
10	図④	歌川豊国(三代)	八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033084		作家名は演博014-0229による
11	図⑤		八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033085	梅屋	千葉2033086の版木を改変
12	図⑥		八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033086		
13	図⑦	歌川国芳	八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033087		
14			八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033088		
15			八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033089		
16			八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033090		
17	図⑧		八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033091		
18			八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033092	梅屋	
19			八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033093	梅屋	
20			八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033094		
21			八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033095		
22	図⑨		八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033096		
23			八代目市川団十郎の死絵	横大判錦絵	千葉	2033097		
24	図⑩		八代目市川団十郎の死絵	細判錦絵	千葉	2033098		
25	図⑪		雲野当麻之助(八代目市川団十郎の死絵)	大判錦絵	千葉	2033099		八代目市川団十郎の姿を含む初代坂東うかの死絵二枚続の右側のみ
26		歌川豊国(三代)	不破伴左衛門(八代目市川団十郎の死絵)	大判錦絵	千葉	2033100		
27	図⑫	歌川豊国(三代)	横曽根平太郎(八代目市川団十郎の死絵)	大判錦絵	千葉	2033101		
28			八代目市川団十郎の死絵	横大判錦絵	千葉	2033102		
29	図⑬		市川団十良涅槃像之図(八代目市川団十郎の死絵)	横大々判錦絵	千葉	2033103		
30	図⑭		八代目市川団十郎の死絵	横大判錦絵	千葉	2033104	大坂加賀徳	
31	図⑮		八代目市川団十郎の死絵	横大判錦絵	千葉	2033105		
32	図⑯		八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033106		
33	図⑰		八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033107	梅屋	
34	図⑱		難波夢涙種替紋(八代目市川団十郎の死絵)	大判錦絵	千葉	2033108		

林図版番号	他所蔵先(演博)	他所蔵先(都中図)	他所蔵先 (国立劇場)	他所蔵先(歴博)	他所蔵先(Dien)	その他の所蔵先	千葉市美術館 重複
下15		5721-C049/5721-C049イ 5721-C049ア(吹き出し部 分に色)		F320-186			
			70	F320-125			
下16	201-1622	5721-C069		F320-187/F320- 312			
下19	014-0233	5721-C032/5721-C032ア			DanjuroⅧ5-18	江戸東京博物館	2953486
	014-0231/114-0115/114- 0116/201-5067			H-22-1-22-36	DanjuroⅧ5-37		
下20	114-0100	5721-C023		F320-188	DanjuroⅧ5-15		
					DanjuroⅧ5-47		2953491
下21	114-0114/114-0113	5721-C042				立命館大学 arcBK06-0003「日本 市川三筋之巻物」の うち	
下41		5721-C082					
下25	114-0099 014-0254(色違 う)			F320-372	DanjuroⅧ5-28 (色違う)		
下26							
下27	014-0267						2953501
下28		5721-C037			DanjuroⅧ5-16		
下29							
下30		5721-C060				立命館大学 arcBK06-0003「日本 市川三筋之巻物」の うち	2953498
下31							
下33							
下34							
下36							
	114-0084～114-0086 114-0126～114-0128				DanjuroⅧ5-42 (右端のみ)	名古屋市立博物館	
下17	014-0228/114-0096/ 114-0109(建物のシルエッ トなし)	5721-C050(建物のシルエッ トなし)			DanjuroⅧ5-35	立命館大学 arcBK06-0003「日本 市川三筋之巻物」の うち	
	014-0236/114-0080 114-0081/114-0244				DanjuroⅧ5-36		
	201-5063			F320-184	DanjuroⅧ5-49		
					DanjuroⅧ5-12		
下13		5721-C034 5721-C034ア			DanjuroⅧ5-27		
		N110-004					
					DanjuroⅧ5-38		

No.		作家名	作品名		所蔵先1	所蔵先作品番号	追悼句等筆者	備考
35	図⑱		八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033109		
36	図⑲		八代目市川団十郎の死絵	横大判錦絵	千葉	2033110		
37			八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033111		
38			八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033112	四季の屋	
39			八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033113	梅屋	
40	図⑳		八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033114	梅屋	
41	図㉑		曾我五郎(八代目市川団十郎の死絵)	横大判錦絵	千葉	2033115		
42	図㉒		八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033116		
43	図㉓		八代目市川団十郎の死絵	横大々判錦絵	千葉	2033117		
44			心のうち(八代目市川団十郎の死絵)	横大判錦絵	千葉	2033118		
45	図㉔		八代目市川団十郎の死絵	横大判錦絵	千葉	2033119		
46	図㉕		七不供人(八代目市川団十郎の死絵)	横大判錦絵	千葉	2033120		
47			むかしはなし さるかにがっせん (八代目市川団十郎の死絵)	横大判錦絵	千葉	2033121		
48			高野山麓 鏡石の図(八代目市川団十郎の死絵)	横大判錦絵	千葉	2033122		
49	図㉖		八代目市川団十郎の死絵	横大判錦絵	千葉	2033123	香吹山人	
50			八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉	2033124		
51	図㉗		むかしはなし(八代目市川団十郎の死絵)	横大判錦絵	千葉	2033125		
52	図㉘		八代目市川団十郎の死絵	横大々判錦絵	千葉	2033126		
53	図㉙		夫婦合体 飲の獣 一名おタメごかし (八代目市川団十郎の死絵)	横大々判錦絵	千葉	2033127		
54	図㉚	歌川国芳	六の玉顔(八代目市川団十郎の死絵)	大判錦絵二枚続	千葉	2033201		
55	図㉛	歌川国芳	八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵三枚続	千葉	2913239		
56	図㉜		八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉 (青木)	2953485		
57			八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉 (青木)	2953488		
58	図㉝	歌川豊国(三代)	地雷也の変身(八代目市川団十郎の死絵)	大判錦絵	千葉 (青木)	2953489		
59	図㉞		八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉 (青木)	2953492		
60	図㉟		八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉 (青木)	2953494		
61	図㊱		勧進帳(八代目市川団十郎の死絵)	大判錦絵	千葉 (青木)	2953495		
62	図㊲	歌川豊国(三代)	大星由良之助(八代目市川団十郎の死絵)	大判錦絵	千葉 (青木)	2953496		
63	図㊳	歌川豊国(三代)	不破伴左衛門(八代目市川団十郎の死絵)	大判錦絵	千葉 (青木)	2953497		
64			八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	千葉 (青木)	2953500		
65			八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	演博	201-5059		
66		歌川豊国(三代)	清水清玄(八代目市川団十郎の死絵)	大判錦絵	演博	201-5066		
67		歌川豊国(三代)	八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	演博	201-4746		

林図版番号	他所蔵先(演博)	他所蔵先(都中図)	他所蔵先 (国立劇場)	他所蔵先(歴博)	他所蔵先(Dien)	その他の所蔵先	千葉市美術館 重複
		5721-C030(背 地白)	68		Danju roⅧ5-22 (右のみ 背 地 白)		
上1	114-0087/114-0088 014- 0259/014-0221(下のみ)	5721-C031-01～02/5721- C031-01ア～02ア					
		5721-C088/M242-004-05			Danju roⅧ5-17		
					Danju roⅧ5-52 Danju roⅧ5-5 (背地三升模様)		
	114-0132/014-0252				Danju roⅧ5-34		
下35	014-0232			F320-371			
					Danju roⅧ5-32		
				F320-178	Danju roⅧ5-30		
下32							
下23							
下24					Danju roⅧ5-14		
* 1							
下18							
					Danju roⅧ5-46		
					Danju roⅧ5-24 (八代目の印な し)		

* 1 部分、裏焼き

No.		作家名	作品名		所蔵先1	所蔵先作品番号	追悼句等筆者	備考
68			八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵二枚続	演博	201-2108～09		
69		歌川豊国(三代)	足利次郎君(八代目市川団十郎の死絵)	大判錦絵	演博	114-0074		
70			思ひ当り狂言大江戸の名残 忠臣蔵文句くち合(上下)(八代目市川団十郎の死絵)	大判錦絵二枚続	演博	114-0065～66		
71			八代目市川団十郎の死絵	横大判錦絵	演博	114-0095		
72		歌川国芳	早野勘平(八代目市川団十郎の死絵)	大判錦絵	演博	114-0102		
73			夢空旅寝枕(八代目市川団十郎の死絵)	大判錦絵	演博	114-0101		
74		歌川豊国(三代)	大星由良之助(八代目市川団十郎の死絵)	大判錦絵	演博	114-0119		
75		歌川豊国(三代)	八代目市川団十郎の死絵(口上)	大判錦絵	演博	114-0120		
76		歌川豊国(三代)	八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	演博	114-0122		
77		歌川国芳	八代目市川団十郎の死絵(口上)	大判錦絵	演博	114-0129		
78		歌川国芳	八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	演博	114-0131		
79		歌川豊国(三代)	八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	演博	114-0070		
80		歌川豊国(三代)	伊豆屋与三郎(八代目市川団十郎の死絵)	大判錦絵	演博	114-0072		
81		歌川国芳	八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	演博	014-0216		
82			八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	演博	014-0244		
83		歌川豊国(三代)	八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	演博	014-0261		
84			成田三非道女房開帳(八代目市川団十郎の死絵)	大判錦絵	都中図	5721-C038		
85			悪源太義平の霊(八代目市川団十郎の死絵)	大判錦絵	都中図	N019-001		
86			悉陀太子に別れて車匿力なく立帰る図	大判錦絵二枚続	都中図	N085-005・N085-007		
87		歌川国芳	見立本朝酔菩提(八代目市川団十郎の死絵)	大判錦絵三枚続	国立劇場	71		
88			八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	歴博	H22-1-22-40		
89			八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	歴博	F320-124		
90			八代目市川団十郎の死絵	小判錦絵	歴博	F320-212		
91			八代目市川団十郎の死絵	小判錦絵	歴博	F320-315		
92			八代目市川団十郎の死絵	小判錦絵	歴博	F320-316		
93			八代目市川団十郎の死絵	一枚摺	歴博	F320-317		
94			八代目市川団十郎の死絵	一枚摺	歴博	F320-375		
95			八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	歴博	F320-189		
96			八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	歴博	F320-517		
97			八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	Dien	DanjuroⅧ 5-25		
98			八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	Dien	DanjuroⅧ 5-48		
99			八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	Dien	DanjuroⅧ 5-51		
100		歌川国麿	八代目市川団十郎の死絵	大判錦絵	林論文	論文下1		
101			八代目市川団十郎の死絵	不明	林論文	論文下22		

林園版 番号	他所蔵先(演博)	他所蔵先(都中園)	他所蔵先 (国立劇場)	他所蔵先(歴博)	他所蔵先(Dien)	その他の所蔵先	千葉市美術館 重複
				F320-373	BandoShiuka 6-25		
			78				
				F 320-173			
下38			73	F 320-208			
			75				
	014-0266(右のみ)						
	114-0092 /404-0184						
				F320-193			
					DanjuroVIII 5-40		
	114-0252/014-0300 /114-0249	5721-C044	76				
	114-0303～0305	572-C017/572-C017〈ア〉	81	F320-4-30			
	014-0297	5721-C082	72				
			80				
		5721-C037		F320-127			
		5721-C060					

林園版 番号	他所蔵先(演博)	他所蔵先(都中園)	他所蔵先 (国立劇場)	他所蔵先(歴博)	他所蔵先(Dien)	その他の所蔵先	千葉市美術館 重複
下39		5721-C125(役者名なし)	85	F320-376/ F320-188			

八代目市川団十郎の姿を含む初代坂東しうかの死絵

No.		作家名	作品名	判型	所蔵先 1	所蔵先作品番号	追悼句等筆者	備考
1	図④⑩		初代坂東しうかの死絵	大判錦絵	千葉	2033128		
2	図④⑪		初代坂東しうかの死絵	大判錦絵	千葉	2033140		
3	図④⑫		浦里と時次郎(初代坂東しうかの死絵)	大判錦絵	千葉	2033141		
4	図④⑬		白井権八と女長兵衛(初代坂東しうかの死絵)	大判錦絵 二枚続	千葉	2033142		
5	図④⑭		極楽道中図(初代坂東しうかの死絵)	大判錦絵 二枚続	千葉	2033143		
6	図④⑮		初代坂東しうかの死絵	大判錦絵 二枚続	千葉	2033132 (左のみ)		
7			初代坂東しうかの死絵	大判錦絵	演博	114-0091		
8			初代坂東しうかの死絵	大判錦絵	演博	114-0091		
9			初代坂東しうかの死絵	大判錦絵	演博	201-5064		
10			お軽と勘平(初代坂東しうかの死絵)	大判錦絵 二枚続	演博	201-5072～ 5073		
11			御祭佐七芸者小糸(初代坂東しうかの死絵)	大判錦絵	演博	114-0235		
12			初代坂東しうかの死絵	大判錦絵	演博	114-0236		
13			初代坂東しうかの死絵	大判錦絵	演博	114-0248		
14			初代坂東しうかの死絵	大判錦絵 三枚続	演博	114-0287～ 0289		
15			春日屋時次郎 山名屋浦里(初代坂東しうかの死絵)	大判錦絵	演博	014-0296		
16			芸者八重吉 わしの長吉(初代坂東しうかの死絵)	大判錦絵 二枚続	都中図	5721-C017		
17			初代坂東しうかの死絵	大判錦絵	都中図	5722-C025		
18			初代坂東しうかの死絵	大判錦絵	都中図	5722-C040		
19			向疵ノ与三 横ぐしお富(初代坂東しうかの死絵)	大判錦絵	都中図	N255-001		
20			明烏夢泡雪(初代坂東しうかの死絵)	大判錦絵	都中図	N244-005		
21			芸者おしゅん 井筒屋伝兵衛(初代坂東しうかの死絵)	大判錦絵	都中図	N239-008		
22			初代坂東しうかの死絵	大判錦絵 三枚続	国立劇場	82		
23			初代坂東しうかの死絵	大判錦絵	国立劇場	77		
24			初代坂東しうかの死絵	大判錦絵	国立劇場	79		
25			初代坂東しうかの死絵	大判錦絵	歴博	F320-191		
26			初代坂東しうかの死絵	大判錦絵	歴博	F320-195		
27		歌川豊国 (三代)	初代坂東しうかの死絵	大判錦絵	Dien	Bando Shiuka 6-28		

八代目市川団十郎の姿を含む初代市川猿蔵の死絵

No.		作家名	作品名	判型	所蔵先 1	所蔵先作品番号	追悼句等筆者	備考
1	図④⑯	歌川豊国 (三代)	曾我兄弟(初代市川猿蔵の死絵)	横大判錦絵	千葉	2033144		



③ 千葉 2033083



② 千葉 2033081



① 千葉 2033058



⑥ 千葉 2033086



⑤ 千葉 2033085



④ 千葉 2033084



⑨ 千葉 2033096



⑧ 千葉 2033091



⑦ 千葉 2033087



⑫ 千葉 2033101



⑪ 千葉 2033099



⑩ 千葉 2033098



⑮ 千葉 2033105



⑭ 千葉 2033104



⑯ 千葉 2033106



⑬ 千葉 2033103



⑯ 千葉 2033109



⑰ 千葉 2033108



⑱ 千葉 2033107



⑳ 千葉 2033114



㉑ 千葉 2033110



㉒ 千葉 2033116



㉓ 千葉 2033115



㉔ 千葉 2033119



㉕ 千葉 2033117



㉖ 千葉 2033123



㉗ 千葉 2033120



㉘ 千葉 2033126



㉙ 千葉 2033125



㉚ 千葉 2033201



㉛ 千葉 2033127



㉔ 千葉 2953485(青木)



㉕ 千葉 2913239



㉖ 千葉 2953494(青木)



㉗ 千葉 2953492(青木)



㉘ 千葉 2953489(青木)



㉙ 千葉 2953497(青木)



㉚ 千葉 2953496(青木)



㉛ 千葉 2953495(青木)



㊤ 千葉 2033141



㊦ 千葉 2033140



㊧ 千葉 2033128



㊨ 千葉 2033143



㊩ 千葉 2033142



㊪ 千葉 2033144



㊫ 千葉 2033132

Shini-e Death Prints as Pictures: Focusing on Death Prints in the Style of *Nehan* Images

Itô Shiori

From the late Edo period through the Meiji period, commemorative *ukiyo-e* print portraits, known as *shini-e*, which can be translated as death pictures, memorial pictures or obituary prints, were created upon the death of kabuki actors. These death prints included the obituary and an image of the deceased, and are thus a special type of actor print. These prints constitute important research material both for the study of actor prints and for understanding views of life and death as seen in funerary rituals of the period. These prints are also quite fascinating as pictures. This article investigates the genre of death prints as pictures.

This discussion is based on confirmation of the scope of the death print. *Kawaraban* and *surimono* specialist print formats which are not usually discussed as *ukiyo-e* prints, are closely related to death prints in terms of content. While in format death prints differ from the printed-book format death print “*Tsuizenkusazôshi*”, the two genre share the common function of mourning a deceased person, and thus both should be considered in a study of content.

Given that death prints depict images of the deceased, one way of categorizing them is according to their subjects. When several subjects are depicted in one print, often the most recently deceased of the several figures is the main subject of the print. However, with death prints which include several famous figures, such as the work depicting Ichikawa Danjurô VIII and Bandô Shuka I, there are some cases in which the death of the second famous figure provided the opportunity for production of the death print; therefore, in terms of content, both of the deceased were the subject of the print and its texts. When discussing death prints, it is best if the discussant is aware of the handling of the intended print subject.

There are many cases in which death prints were created in the guise of *nehanzu*, or images of Sakyamuni entering nirvana, a typical Buddhist image. Further, the single print format images were also often in the guise of *nehanzu*. Originally the *nehanzu* was designed to depict Sakyamuni entering nirvana, and thus had a memorial function, and these death prints also carry this similar memorial function. Further, the standard iconography of *nehanzu* images, with the deceased depicted in oversized form and surrounded by large numbers of mourning animals, was taken as is into the death print genre. Both the creators of death prints and their audiences all shared visual knowledge of *nehanzu* imagery, and the partial use of *nehanzu* imagery and iconography in a death print led to the creation of highly complex image compositions that would be fully understood by their audiences.

Given the speed with which death prints were created immediately after their subject's death as a way of quickly disseminating the news of the death, the degree of finish on each image is frequently not particularly high. There are many extant works that had special subjects of “showing the dead,” and there are various different handlings of the subject in these instances. *Ukiyo-e* actor prints are portraits in the sense that they generally depict specific individuals. Amidst the overall genre of actor prints in which some works cannot be construed as specific portraits, the death print has a more consistent element portraiture about it. The author would like to continue research in this area with an investigation of death prints as portraits and consideration of death prints which incorporate a “picture within the picture” compositional form.

Appendix:

Catalogue of Death Prints for Ichikawa Danjurô VIII (working draft)

(Translated by Martha McClintock)

千葉市美術館研究紀要
採蓮 第十号

二〇〇七年三月三十一日発行

編集・発行―財団法人千葉市教育振興財団
千葉市美術館

二六〇―八七三 千葉市中央区中央三―十八
電話〇四三―二二一―二三一一(代)

制作――印象社

Bulletin of Chiba City Museum of Art
Siren No.10

March 31, 2007

Edited and Published by
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733 JAPAN
Phone. 043-221-2311

Produced by
Insho-sha

ISSN 1343-148X